

氏名(本籍)	うめ だ たま み 梅 田 珠 実 (広 島 県)
学位の種類	博 士 (医 学)
学位記番号	博 乙 第 1757 号
学位授与年月日	平成13年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	医学研究科
学位論文題目	日本の異性間性的接触によるエイズの特徴 —エイズサーベイランスによる英国及び米国との比較研究—
主 査	筑波大学教授 博士(医学) 大久保 一 郎
副 査	筑波大学教授 医学博士 林 英 生
副 査	筑波大学教授 保健学博士 加 納 克 己

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

日本の人口あたり HIV 感染者数やエイズ患者数は、欧米に比して依然低率であるものの、年々増加を続けている。今後わが国の HIV 流行がどこまで増加していく可能性があるかを検討することは、公衆衛生上重要な課題である。本研究では、感染者及び患者数の約60%を占める異性間性的接触によるエイズについて、過去の患者数の推移及び今後の動向に関連する疫学的特徴を、HIV 感染が先行した他の先進国との比較により明らかにすることを目的とした。

(対象と方法)

日本との比較の対象として、豊富なエイズサーベイランスデータが存在する英国及び米国を選定した。基礎資料として、各国のエイズサーベイランスに基づく報告書から得た、感染経路、国籍・人種、性・年齢、診断年別のエイズ患者数を用いた。比較の対象として、明確な自覚症状を有し医療機関を受診することにより把握されるエイズ患者数を用いた。また、「3剤併用療法」が普及し始めた1996年より後の年は対象とせず、サーベイランス開始から1996年までの診断例を用いて検討した。集計方法としては、日本、英国、米国ごとに感染経路、国籍・人種別及び診断年別のエイズ患者数を算定した。HIV 感染拡大初期の時点からそれ以降の異性間性的接触によるエイズ患者数の推移を比較する試みとして、当該エイズ患者数が一定の値に達した年を基準とし、その後の人口あたり当該エイズ患者数を3カ国で比較した。

(結果)

英国、米国の異性間性的接触によるエイズ患者数が近年横ばい又は減少傾向であったのに対し、日本では増加を続けていた。異性間性的接触によるエイズ患者数が一定の値(年間新規報告数30以上)に達した時点から2年間の増加率は、日本人が2.3倍、英国白人が2.4倍、米国白人が5.0倍であった。異性間性的接触によるエイズ患者累積数の男女比は、日本人が6.3、英国1.1、米国0.5であった。診断時の年齢分布は、英国男性、米国男性では30～34歳にピークあったのに対し、日本人男性では35～54歳になだらかなピークがあった。日本人女性と英国女性、米国女性との比較では、年齢分布の違いは認められなかった。

(考察)

日本の累積エイズ患者数が比較的少ない理由として、患者数が増加し始めた年次が遅く、同性間性的接触、静注薬物濫用等のハイリスク行動による感染が少なかったことがあげられるが、本研究では新たに、患者数の少なさに関連する異性間性的接触によるエイズの特徴を見出した。異性間性的接触によるエイズについては、日本人男性で英国男性、米国男性に比べ明らかに高い年齢層に患者数のピークが認められた。性行動は一般に若年齢ほど活発であることを考慮すると、日本では若年男性でのHIV曝露が比較的少なかったため、感染者数が英国、米国に比べて少なかったと考えられる。また、男女比が日本は英国、米国に比べ著しく男性に偏っていたが、このことは、今回分析した期間において日本人男性が主として日本のサーベイランスでは把握しきれない外国の感染女性から感染したことを示唆する。日本人男性から日本人女性の感染は抑制されていたと考えられる。

3カ国間の感染拡大時期の違いを考慮して、患者数が一定の値に達した時点からの増加傾向を比較したところ、日本と英国、米国との差は縮小した。日本の異性間性的接触によるHIV感染流行初期の傾向は英国白人、米国白人における流行初期の推移とそれほど大きく異なるものではないと考えることができ、今後日本において英国白人、米国白人のその後の増加と同様の増加がみられる可能性が示唆される。特に、以前はHIVに曝露される機会が少なかった10歳代、20歳代の若年者と女性における感染の広がり、今後の動向に最も大きな影響を及ぼすと考えられることから、若年者と女性に曝露が及びつつあることを考慮した予防対策の推進が緊急に求められる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

わが国のHIV感染者及びエイズ患者数は欧米先進国と比して少ないことは周知の事実であるが、本論文では米国及び英国と比較することによりわが国の感染状況の特徴を明らかにし、今後のエイズ対策に資することを目的とした。結果として、異性間性的接触によるエイズについては日本人男性では英米と比して高い年齢層に患者数のピークがあった。これはわが国の患者数の少ないことの理由の一つとして考えられるが、若年者層の異性間性的活動がより活発になるにしたがい、感染者数が増加する可能性が示された。わが国のHIV感染者及びエイズ患者数の今後の動向には十分な注意を払う必要があり、特に10、20歳代の若年者と女性を対象とした予防対策の推進が急務の課題であることが明らかになった。

本研究は今後のわが国のエイズ対策に大きな影響を及ぼすものであり、行政的研究として価値あるものと評価できる。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。